銃を持たない兵士の従軍記

内田修道

一九〇四年（明治三七）三月一〇日正午一二時、召集令状を携えた和服姿の大貫政吉は鹿沼駅から乗車、午後五時三〇分東京上野に到着した。二泊して一二日早朝麹町衛戍病院に行き、召集令状を提出。所属部隊、第一師団衛生隊第二中隊第二小隊第四分隊。この日から一〇日間負傷者手術の訓練、二二日品川を列車にて出発、二四日宇品（現広島港）に到着。ここで一ヶ月間負傷者手当法の学科を学び、担架演習を受ける。四月二四日宇品港を出帆、五月一〇日清国盛京省張家屯に上陸、戦中では演芸大会もあり「大愉快」な気分にしたった政吉はいきなり非日常の世界へと投げ込まれる。

旅順攻防戦の前哨戦、金州城・南山の戦闘、衛生隊第一・第二中隊が収容した死傷者の数一九〇五名、当時一個大隊は約九六〇名だから二個大隊が全滅したことになる。軍全体で死傷者約四五〇〇人、一個旅団の兵員が失われたことになる。「我カ軍歩兵ハ突撃ニ出テハ斃レ又出テハ斃レ誠ニ誠ニ残念ニ思ヒ」負傷した兵士を収容して最前線に開設した繃帯所で応急手当し、そして後方の野戦病院に送る。救護活動を困難にしたのは雨の如く降り注ぐ砲弾だけではなかった。激しい降雨「携帯品モ身体モ雨ニ湿レテ其形ハ恰モ水中ニ入リタル如ク」「路ハ河トナリ、水ノ流ハ強ク足迄テ流サル程ノ急流ニテ我レラ傷者運搬ニ困難セリ」。八月に入ると戦闘はますます激しくなり、「我カ軍ノ死傷者ハ最モ多シ」、政吉の中隊だけで一三日の戦闘で一四〇〇人もの負傷者を収容している。そして銃を持たない衛生兵にも負傷者が続出する。一九日旅順口総攻撃が始まり、「我等ヘ砲弾及小銃弾ノ飛来スル場所ニ露営」、繃帯所で即死者・重傷者が発生した。二〇三高地の戦闘は凄惨を極めた。

一分時間ニ六百発ノ機関砲ヲ恰モポンプニテ水ヲ注クガ如ク猛烈ノ射撃ヲ成セシ為メ我ガ軍ハ多大ノ損害ヲ蒙ムリ守備スル事ヲ得ス

一端突撃で確保した敵陣地も兵員の損傷が大きく、確保できず撤退した。

我ガ第二中隊ハ決死隊ヲ撰抜シテ、各人麻縄一本宛々携帯シテ第一戦ニ至リ、傷者ヲ麻縄ニテ背ニ担ヘ飛カ如クニ山ヲ越ヒテ傷者ヲ繃帯所ニ収容ス

この救出行動中中隊の担架手二名戦死、重軽傷四五名を生じた。政吉の記録から、それまで中隊の収容した死傷者の数が消えた。曰く、「敵之死傷山ノ如シ、我カ軍モ山ノ如シ」。

この激しい戦闘で得た政吉の感慨は勇ましい戦闘ではなかった。

我レモ此ノ大激戦ニ参加シタレトモ、困難ノ事ヤ、危険ノ事ヤ、戦死者ノ有様ノ事ト傷者ヲ救護シタル時ノ傷者之喜ビノ事ハ筆紙ニ尽シガタシ

銃を持たず、にもかかわらず最前線で自らの命を曝し、戦争という殺し合いの場において生と必死に向かい合っている。

政吉の記録は続く、未体験の戦争という場で瑞々しい感性を持って。〈なお、来春刊行予定『鹿沼市史資料編　近現代2』に収録〉。

（京浜歴史科学研究会代表二〇〇二年一二月二三日記す）